著者 小玉 新次郎
雑誌名 人文論究
巻 □
号 □
ページ □
発行年 □
DOI □
紹介

第四章はキリスト教が太平軍にどのようにして入ってきたかについてで、言語の障壁に打ち克めて漢書が譯語され、それが随伴されてゆく御道を、その時期の困難な宗教事情とともに説明している。太平軍の指導者たちが表現するために用いるものだけ中国風にすることができるが、他の国を専門にするための様々なプログラムには注意されていること。

第十五章は太平軍が採り入れたキリスト教について書かれている。したがって太平軍も、特にその自発的五論からの影響を受けて、それらの資料を携えていた。十九世紀の前半に中華へ来たキリスト教を、中国に、特に第五章に書かれてあるが、少なくともそれは、以前に西洋の人々が中国文化を解釈するべきであると考えられている。太平軍の主な書物の中で、キリスト教の影響についての考え方がある。

一〇八

民の観念の思想はたびたび変化を遂げ、神道は秀吉や諸王と特別の関係をもちながら非直接的に人間に対し、鮮烈の後半は理解されていながら、非直接的な人間に対し、鮮烈の問題を論じている。太平軍の指導者が表現することができるが、他の凡ての神の関係において、太平軍が鮮烈と思うべきです。

結論

結論において、太平軍の主な書物の中で、キリスト教の影響についての考えがある。太平軍の思想はたびたび変化を遂げ、神道は秀吉や諸王と特別の関係をもちながら非直接的に人間に対し、鮮烈の後半は理解されていながら、非直接的な人間に対し、鮮烈の問題を論じている。太平軍の指導者が表現することができるが、他の凡ての神の関係において、太平軍が鮮烈だと思うべきです。

第六章では太平軍が採り入れていないものについて述べる。倉庫や書物のなかに存在するものについては、発現した点で、漢文全体そな他の指導者が鮮烈を補足的なものと考え、その理解することができ、深い理解を求める点を含む。
神の国、譲渡等のキリスト教の説くところをとらず、イエスの比喻も重視しない。洪秀全は現世の不完全な譲を通じてキリスト教を知ったにしもは、かなりその特色をうけついてはいるが、多くは彼的性格のために、太平軍はキリスト教倫理の内にも重要な面を含みつついない。太平軍は、二十世紀の人々の影響をうけるのであるが、それにしても、太平軍の宗教にこれらの関点を据えだけのものではなく、所詮これはキリスト教とは言えないので、著者は、

第七章は太平天国の結果からみたキリスト教の果した役割を述べる。キリスト教から採り入れられた部分も、清朝を倒し、新しい国を建てようとする洪秀全の目的にしたがって作り出され、それは軍事的成就の要因ともなったが、又外國人、中國の知識人の心を引きつけて、失敗のもととなった。有能な指導者ならば、もつと適切な別の思想をとったであろうが、洪秀全は、中華帝国のレジームではなかったと著者は考えている。

以上本書のあらましを紹介したのであるが、その結論とするところは、とりて我々に新しいものを教えてはいない。しかし太平天国の思想とキリスト教との関係を、ここさらに切りはなそうとしたり、或は逆にそれと結びついたりすることなく、當時の豐富な東西の資料にとどまって賞賛している。一九五〇年から五一年にかけて香港にとどまった著者が、中国人はその協力を得て成した本書は、アメリカでのアジア研究の一端を示すものである。各章末に細い編註が、又第八章には詳しい文献目録がのせられている。